

至仏山「東面登山道利用実態調査」報告書

尾瀬自然保護指導員ネットワーク

代表：高橋一也

監修：鈴木一義

至仏山東面登山道利用実態調査報告書

この度は、東面登山道の現状を調査するため、尾瀬自然保護指導員ネットワーク（以下に略記）では、お世話を頂いた方々の調査結果、「至仏山東面登山道」（以下、調査区）を走る歩行者（以下、「歩行者」）の実態調査を行いました。貴施設における歩行者の調査結果を掲載してきました。されば、平成14年7月1日付の調査結果を掲載調査中（5月中旬～7月末）の実態調査も実施いたしました。

本調査は蛇紋岩という特徴ある地質になります。森林限界は1,700メートルと他の登山道の中車としても知られています。また、この地帯は、標高1,500メートル以上の標高帯に開拓地が点在するため、歩行者が外れて歩くのが困難な場所が多いため、歩行者は安全な人間として多くが毎年登っています。

以下、調査結果を示す。調査は、7月1日～7月30日の期間で実施した。調査は、以下の通りである。

2002年7月実施

以下、調査結果を示す。調査は、7月1日～7月30日の期間で実施した。

以下、調査結果を示す。調査は、7月1日～7月30日の期間で実施した。

以下、調査結果を示す。調査は、7月1日～7月30日の期間で実施した。

以下、調査結果を示す。調査は、7月1日～7月30日の期間で実施した。

以下、調査結果を示す。調査は、7月1日～7月30日の期間で実施した。

以下、調査結果を示す。調査は、7月1日～7月30日の期間で実施した。

尾瀬自然保護指導員ネットワーク

調査内容

平成14年10月

至仏山「東面登山道利用実態調査」報告書

尾瀬自然保護指導員ネットワーク

代表 高橋喬

担当幹事 永島勲

はじめに

至仏山東面登山道（至仏山頂～山の鼻）は、植生の保護・登山道の整備・植生の復元等の理由で平成元年より閉鎖されていましたが、植生の復元等が不十分のまま平成9年8月1日に閉鎖が解除されてしまいました。

ネットワークでは、平成9年8月に第1回の調査を行い、平成10年と平成11年は7月に、平成12年及び平成13年は8月にそれぞれ東面登山道の実態調査を継続実施し、再開における問題点等を指摘してきました。さらに、平成10年5月には残雪期の登山道閉鎖期間中（5月中旬～6月末日）の実態調査も実施いたしました。

至仏山は蛇紋岩という特異な地質により、森林限界は1700メートルと低く高山植物の宝庫としても知られています。さらに、至仏山は交通の便も良く折からの登山ブームと深田久弥の日本百名山としても有名で、年々登山者が増加しています。このため、登山道を外れて歩く入山者の踏み付けによる植生の破壊や裸地化の拡大と安易な入山による事故が毎年発生しています。

7月6日の調査日は天候にも恵まれ、再開6年（6年連続）の実態調査は高山植物の咲き乱れるコースで雄大な山岳展望も楽しみながら、予定通り実施することができました。

以下、平成14年度の至仏山東面登山道利用実態調査の結果を報告いたします。

記

I、実施日 平成14年7月5日（金）～6日（土）前泊日帰り

7月6日に日帰り調査／天候：晴

II、調査場所 至仏山東面登山道（至仏山頂～山の鼻 2.9Km）

調査時間；鳩待峠発7:52～至仏山10:55～山の鼻13:40～鳩待峠着15:20

III、調査者 永島 勲（埼玉県児玉郡）

松前 雅明（福島県郡山市）

本戸 信男（東京都東村山市）

長島 瞳世（静岡県下田市）

西山 伸一（神奈川県横浜市）

棚橋 一 収（埼玉県秩父市）

IV、調査内容

1. 登山道周辺の土壤流失が拡大

ネットワークの5年間の継続調査において、東面登山道の“土壤流失が確実に拡大”していることを確認してきました。登山道の一部では地下の岩盤まで剥き出しになってしまった個所もあり、植物の生育にとって重要な土壤の流失は極めて深刻です。（写真：2-1、2-2、2-3を参照）このまま放置しておくと、雨水や雪解け水により土壤や岩石の流失は更に進み、地下岩盤の露出が拡大することは必至です。

2. 登山道の現状と問題点

特別保護地区における登山道のあり方として、保全や安全のためとはいえ、木段や木道の「板張り」の登山道で良いのでしょうか。（写真：1を参照）景観上も考慮した登山道の整備を進めるべきではないでしょうか。「板張り」の登山道より「石積み」の登山道の方が入山者にも景観上からも良いのではないかと思います。

また、登山道沿いの植生地と登山道との境界付近で土壤の露出している斜面における土壤流失止策も不十分です。（写真：3を参照）

今年6月21日の至仏山保全緊急対策会議による「至仏山調査登山」において、G地点（高天原直下の急斜面）では「岩石崩落」の危険もあると須藤志成幸先生（群馬県尾瀬保護専門委員）は指摘しています。また、急傾斜地の「木製の階段」は谷側に傾き、スリップ事故を起こしやすく極めて危険です。入山者の安全確保の面からも早急に対策（階段の補修、注意看板の設置、コースの一部迂回など、抜本策としては入山禁止）が必要です。

3. 入山者の状況

今年の調査は、鳩待峠より登り小至仏山・至仏山を通り山の鼻に下るコース順で実施しました。好天にも恵まれ、残雪期の閉鎖解除直後の土曜日とあって入山者が非常に多く、山頂ではその数108名、休憩場所を探すのも困難であった。入山者の増加による山頂周辺での裸地化問題、あるいは尿尿問題、安易な入山による遭難事故等、押し寄せる入山者への一刻も早い抜本的な対策が望されます。

入山者が急増している至仏山における植生の破壊や登山道荒廃のきっかけは、入山者の踏圧によるものであることに異論はないと思います。至仏山は日本百名山や花の百名山に指定されているため、多い時は1,000人／日（年間35,000人）以上も入山する現状（いわゆるオーバーコース）を考えた場合、まず、集中入山を規制し、分散入山（季節、曜日、時間によって入山者数を制限する。）を強力に推進すべきでしょう。そのためには、これまで以上に登山者（観光業者を含む）への事前の啓蒙が必要です。当然ながら、現在の「残雪期の入山禁止」措置は、登山道の拡張防止・植生破壊の防止あるいは事故・遭難防止等の観点から今後も継続実施は最低限必要です。

登山道荒廃の防止や植生保護のために、また入山者の事故防止のために、蛇紋岩帯でのスリップ事故等の危険性の周知徹底や入山規制の具体的な検討に加えて、抜本的な対策として東面登山道の再閉鎖（通年「入山禁止」）を強く訴えます。

4. 植生回復対策の現状と問題点

残念ながら植生回復対策は「D地点」を観察する限りほとんど進展しておりません。地下の岩盤等が露出した場所は、手遅れではないかと思います。ネットワークのこれまでの調査でも厳しい自然環境下では植生回復は極めて難しいと感じています。(写真：5-1、5-2、5-3、5-4を参照)

(注) 尾瀬保護財団の情報によれば、今年9月の植生回復ではD地点以外でも植生回復作業を実施した模様ですが、その作業面積はD地点を含めて6m²と非常に小規模に留まっています。

しかし、E地点付近においては、他に迂回路が出来たため、従来の登山道の利用が放棄された個所では植生の回復が進んでいる現実もあります。(写真：4を参照)

至仏山ではアヤメ平と違って蛇紋岩地質と急斜面という悪条件をどう克服するのか。植生回復のためには如何に土壌の流失を食い止めるかが、最大のポイントと思われます。

これまでの植生回復作業においては、試行錯誤の連続でご担当の専門家やボランティアの方々のご苦労が偲ばれます。従来の試験的な植生回復作業から速やかに方向転換し、一刻も早く本格的な植生回復対策(財政面と人員面及び技術面)を実施すべき時期にきています。

おわりに

私たち人類は自然の一員として、太古より自然から数々の恩恵を受けてきました。至仏山を含む「特別保護地区」の尾瀬は国民共有の原生自然として、私たちは後世に確実に引き継ぐ責務があります。東面登山道荒廃のきっかけを作ったのは、私たち人間であることを決して忘れてはならないと思います。

そのためには、登山道再閉鎖によって至仏山の自然と接する機会が少なくなる、あるいは無くなる、という我慢も必要ではないでしょうか。

現在「至仏山保全緊急対策会議」の幹事会にて保全対策が検討されていますが、「植生の保護とその復元」を第一に考え、至仏山の通年「入山禁止」を基に恒久的な対策が実施されることを願ってやみません。

以上

至仏山東面登山道荒廃の現状

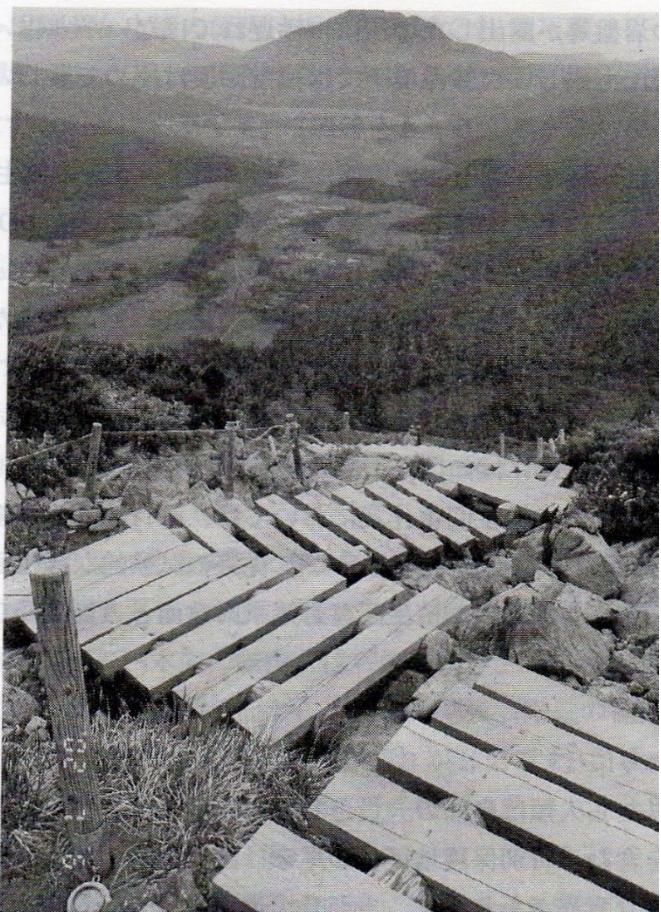
2002年7月6日

1. 至仏山東面登山道の階段

至仏山の登山道は木製の階段が多い。

これは入山者優先の結果だ。

日光国立公園特別保護地区に指定されている至仏山でこのような板張りの登山道で良いのだろうか。



2. 登山道荒廃の現状

2-1. 地下岩盤（蛇紋岩）の露出



2. 地下石盤の露出（2）

こうなると植生復元は手遅れの感を否めない。

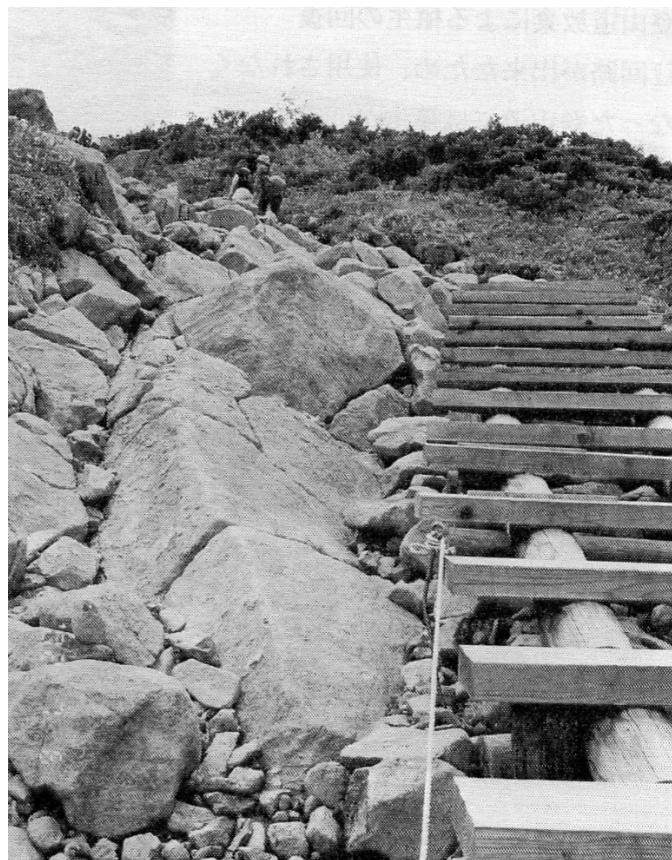


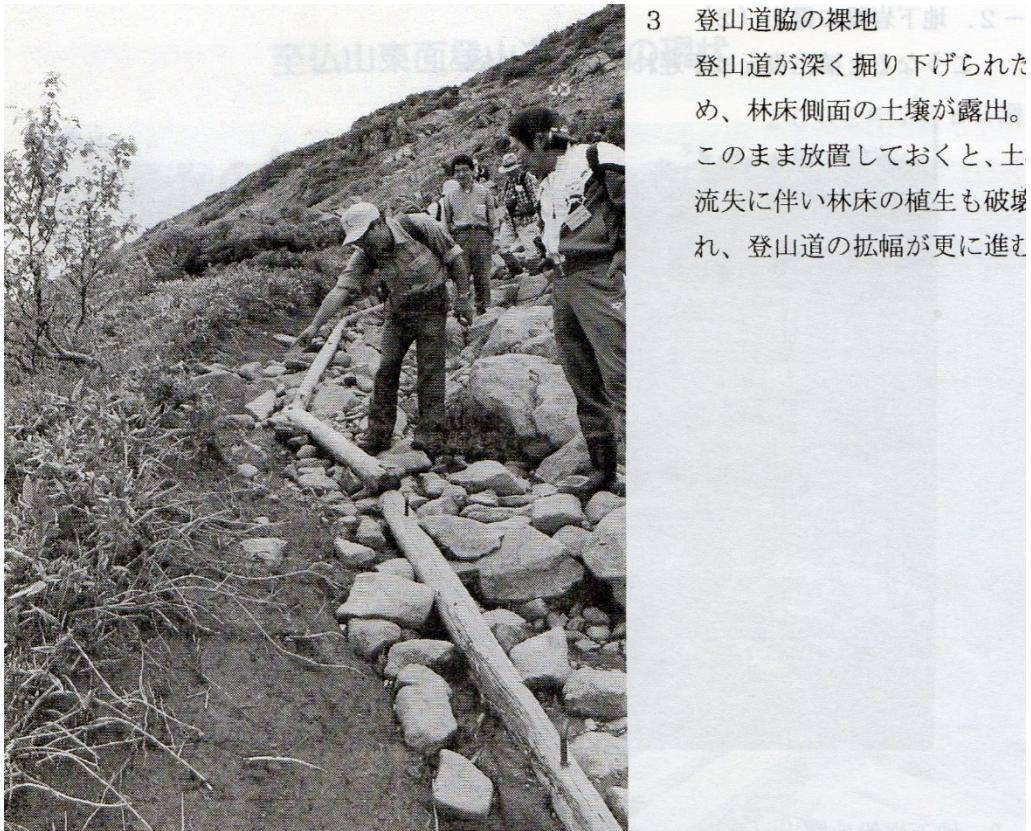
2. 3. 地下岩盤の露出（3）

急斜面の登山道脇では土壤は

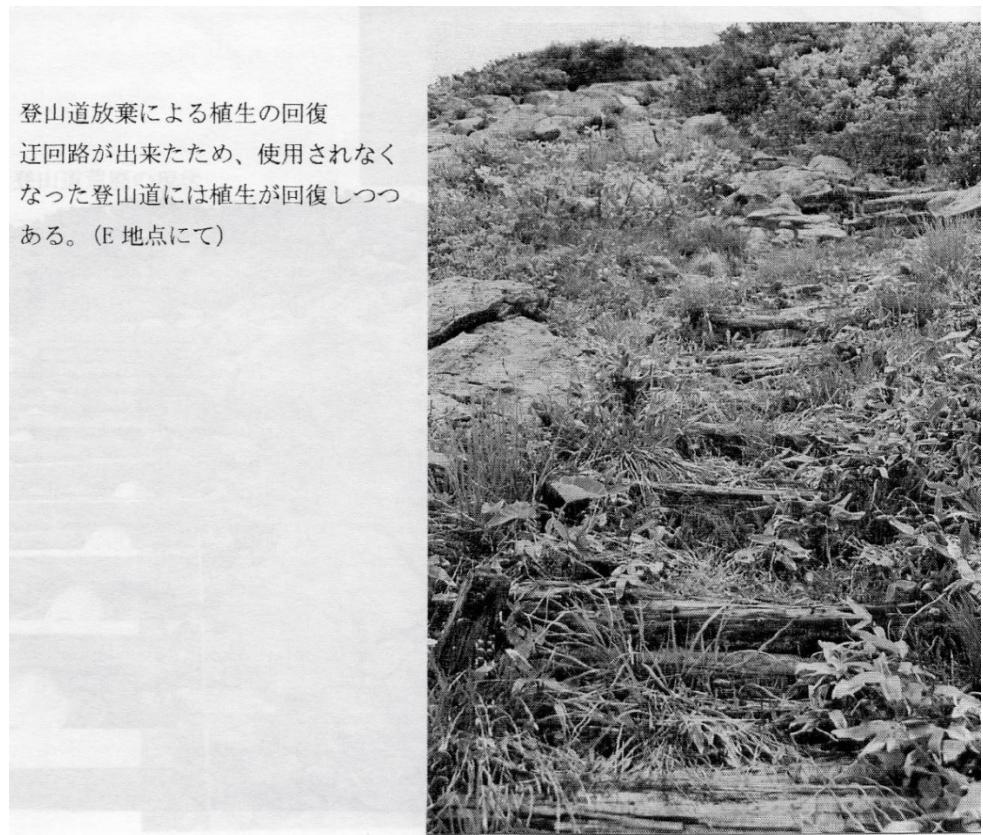
完全に流失し、地下の岩盤が

露出している。





3 登山道脇の裸地
登山道が深く掘り下げられた
め、林床側面の土壤が露出。
このまま放置しておくと、土
流失に伴い林床の植生も破壊
れ、登山道の拡幅が更に進む

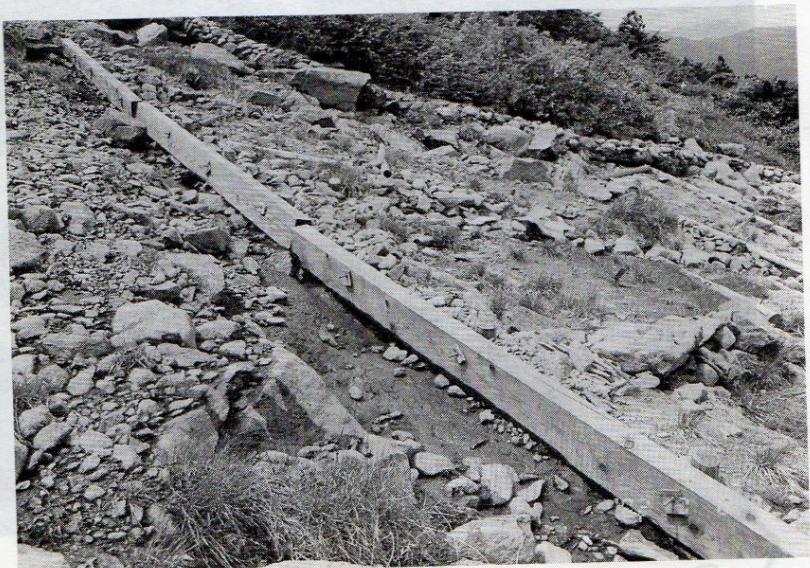


登山道放棄による植生の回復
迂回路が出来たため、使用されなく
なった登山道には植生が回復しつつ
ある。(E 地点にて)

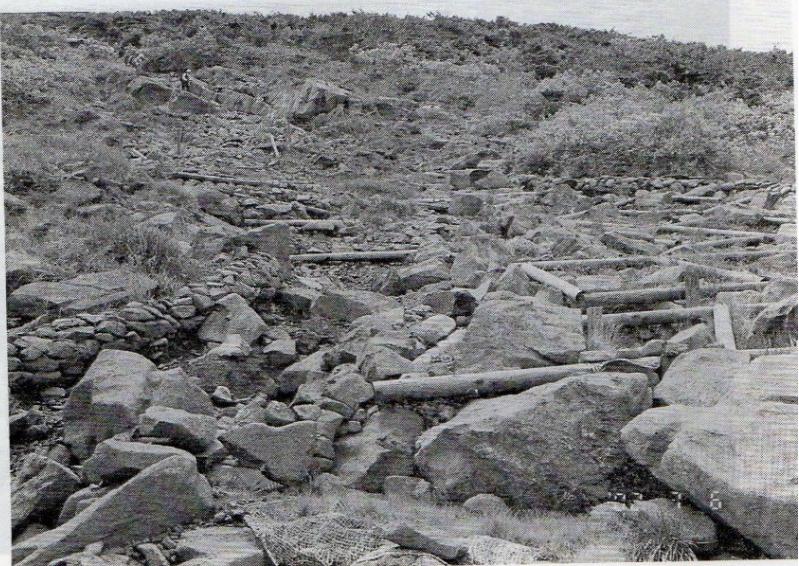
至仏山東面登山道「D地点」

5 D地点の植生の回復状況

5 1 標高1800mのD地点を上部より下部方向を見る。木製の板で土壤流失防止を図っているが、植生の自然回復は極めてわずかである。



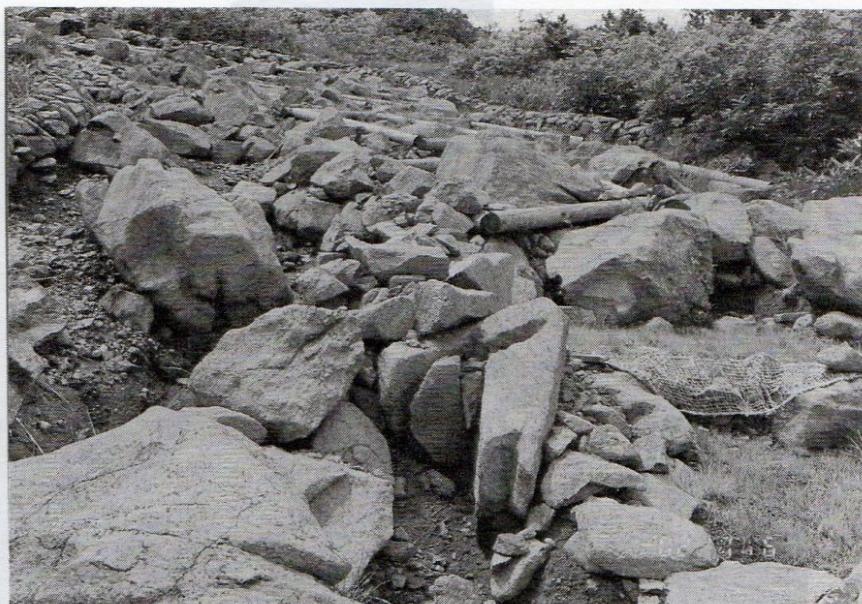
5 2 標高1800mのD地点を下部より上部を見る。年々岩石の露出が大きくなる一方で、植生の回復はほとんど進んでいない。



3. 登山道整備計画の実施の点題

5. 3 標高 1800m の D 地点下部

わずかであるが、植生の回復作業が試みられている。



5. 4 標高 1800m の D 地点下部の植生回復状況

昨年 4 本の「ミヤマナラ」の幼苗を確認したが、今年は 2 本しか確認できなかった。

登山道整備下部地盤の回復



至仏山東面登山道「D地点」拡大図
～ 標高1800m付近の登山道荒廃場所～
至 至仏山山頂

